

# 辰巳会ゆかりの 洋龍寺の歴史（その二）

卷之三

晉書

一、都賀庄篠原村のこと  
攝津国武庫郡都賀庄篠原村は、郡内でも高みにあつて、\*\*ちぬの海を見下ろし、大阪、堺、兵庫、須磨の一の谷まで一眸の中に收まる勝邑の地である。

地勢を見ると、六甲山系長嶺山から南に伸びた尾根が牛小屋山となり更に厳島神社、祥龍寺の地点を通つて、六甲川と柏谷川の合流点まで、かつてこのあたりは、字上ノ島、中ノ島と呼ばれ、丁度馬の背の地形をなしている。

高燥にして水利のよいこの地に、往古から集落が営まれた事は、昭和二十二年三月、牛小屋山周辺から弥生時代の遺跡が発見された事によつて察せられ、中世には都賀庄の政所が、この地形の上におかれていた事でも知られている。江戸時代、現在の篠原本町から中町にかけて「満所屋敷」「元屋敷」「古屋敷」「土井ノ畠」「的場」「的掛け」等の古地名があり、当時公文下司くもんげしとして都賀庄を支配した若林氏が現在なおこの地に居住しているのも興味深い。若林氏は、祥龍寺と縁が深いので、後に詳述するが、これらによつてこの土地が都賀庄の政治・経済・交通の中心であつた事が、うなずける。然しながら、広國山祥龍寺建立の縁起は、残念ながら古い記録が失われていて、詳しくはわからないのである。

これによると、文明元年（一四六九年）の頃、祥龍寺に六反の寺領があつた。

更に二十年後の長享三年（一四八九年）

——都賀庄夏麦指出——の部に

安次名 武斗四升 祥龍寺

武番之内 武斗 祥龍寺

と記され、更に十七年後の永正三年（一五〇六年）

——都賀庄一番段錢注文——の部で

七段 二百五十五文 祥龍寺

の記述がある。四斗四升の麦と、二百五十五文の年貢を納めているところを見ると、この頃には、寺領、伽藍もあり、住職も常住していたと推察される。

宗ちぬ・の・うみ〔茅渟海〕

現在の大阪湾南部に当る。和泉灘。

戦時に供出した釣鐘（正徳二年・一七一二年铸造）の銘によると、「広國山祥龍寺は、法道仙人（六四九年頃）の開基によるもので、平清盛が福原に都を移した頃、寺運盛んで廣く世に榮顯（えいけん）していたが、年所を経て殿堂荒廃し、唯仙人作地蔵菩薩と掌善、掌惡の二童形を残すのみとなつた。元禄九年（一六九六年）監院即宗の時、防長二州の主、毛利吉広公大檀越となつて、頗る禪林を成す」とある。

名及び寺庵等は不明である。

以後の記録で祥龍寺が古文書に現われた最初のものは、「旧天城文書」と云われる古文書の中の「都賀庄寺庵帳」であろう。「旧天城文書」とは都賀庄に於ける文明から天正年間の年貢取立て地検帳（税金帳）の類であるが、その中に初めて祥龍寺の名が見える。現在の灘区寺院と照合すると興味深いので、その全文を載せておく。

「都賀庄寺庵帳之事」	壱町四反半四拾歩	壱町	九段	八段	七段半	六反	壱段	壱反半
市尾山	イチオザン	善興寺持	ミヤコ	味泥幡	ミヤコ	原	八幡上	原善
常住寺	ミヤコ	満福寺	ミヤコ	妙法泉	ミヤコ	慶隆寺	ミヤコ	磨耶山
報恩寺	ミヤコ	觀音寺	ミヤコ	日尾	ミヤコ	慶隆寺	ミヤコ	慶隆寺

五反半  
四反壹百歩  
式反大  
右文明元年十一月 日 川 原  
備中少輔殿ホリノ要脚日記  
船 寺 岩屋免  
仏眼寺

更に二十年後の長享三年（一四八九年）があつた。

安次名　式斗四升　祥龍寺  
式番之内　式斗　祥龍寺

七段 二百五十五文 祥龍寺

※ちぬ・の・うみ　〔茅渟海〕  
和泉国と淡路国との間の海の古称。  
現在の大阪湾南部に当る。和泉灘。

# 辰巳会ゆかりの

## 祥龍寺の歴史（その二）

〈たつみ誌68号よりの続き〉

### 菅 應峰

#### 一、赤松円心の摩耶合戦

平清盛遷都（一一八〇年）と「旧天城文書」の文明元年（一四六九年）までの間に、赤松円心の摩耶合戦があつて祥龍寺も、この動乱に巻き込まれたに違いないので、その概略を記して置きたい。

正慶三年閏二月（一三三三年）赤松円心は護良親王の令旨を奉じて北條氏を討たんとし摂津赤松城に據る。明治四十一年五月高羽村字茶畠（現在の神戸大学構内）の地で、石垣城壕、井戸等整然たる一大城址を発見、この地が赤松城なるものと推定された。これによつて太平記に残る摩耶合戦の條を見ると、まさに地理が符合する。

即ち六波羅勢は、初め八幡林から現在の水車新田の渓谷に入り、赤松城の西、土橋方面から攻撃しようとした。当時、水車新田大堂ヶ原（現在の大土平）は、一尾山十善寺の寺域であつて、立ち並ぶ大伽藍を片端しから焼討ちして進んで来たのである。赤松円心はこれを見て、態と敵を難所に帶き寄せんと、足軽一、二百人を南麓に下して遠矢を射させて引上げた。寄手は勝に乘じて攻略を変え、五千余騎さしも陥れしき南の坂を人馬に息も継がせず、揉みに揉んで攻め寄せる。七曲りという畳しき路に来て寄せ手少し上り兼ねて支えたところ、赤松則祐

南の尾崎（篠原村）に出て八幡林の敵を左側より掩撃した。篠原村城下口の地名は、現在の篠原中町あたりである。次に赤松範資（一黨五百余人、一尾山より打つて出たので、六波羅勢は大に敗北して城の麓より武庫川まで三里の間、人馬上が上に重り死して、行人道を去りあえず（道が通れない）と云う。高羽の南の地は戦場ヶ谷と称して残つてゐる。十善寺々記に「往者刀兵劫（戦い）之時、七堂伽藍七十三僧房盡帰灰燼矣」とあるが、大堂ヶ平の西、百米の地点にあつた祥龍寺も、この時に兵火に無関係ではなかつたであろう。大いに推測出来るところである。

#### 二、若林家と祥龍寺

「旧天城文書」に記録されている文明元年から天正十九年の百二十二年間は、いわゆる応仁・文明の乱で、京都の大半が戦火に焼け、相戦つた守護大名も中央の戦闘に追われてゐる間に領国の守護代以下の武士が台頭して主人の所領・荘園を侵略した戦国の争乱期である。若林氏はこの時、都賀庄の公文下司（役員の身分）で、この時期に実力をつけて來た。この「旧天城文書」も実は若林家に伝えられたものであろうと云われる。

「西摂大觀」に「若林家由緒書」が明らかにされてゐるので、その中から祥龍寺関係と、一部興味深いものを掲載する。

「保元の頃（一一五六六年）篠原村北山に荒熊武藏守興定が城をかまえ、落城の後若林隼人尉範房茲に居城す」と云う。

「恐らく祥龍廃寺後の山嶺稍々夷か（邊鄙）な所、北山城址ならん」とあるので今の牛小屋山か伯母野の辺であろう。保元年間は平盛遷都より二十四年も前の事である。荒熊興定の落城は建武の頃とも云われ

るので、或は摩耶合戦と関係があるかどうか、又、天文年間戦國の初期に若林正秀、菟原合戦に負けて戦死し、その伯母が名残りに思つて戦死の地に松を植えた。これが「摂津名所図会」にある余波松である。後、この原を伯母野と云つた。篠原村の古老、乾俊次氏の話によれば、この松は明治・大正の頃まであつて、毎年若林家がシメナワを張つていたという。

若林家は応仁年間（一四五七年）秀勝の時、篠原村字家東に慶隆寺を再建した記録もある。この慶隆寺は昭和二十年以後、高羽の光台寺と合併して現在は慶光寺となつてゐる。

又、大阪城普請の時、若林正満、六甲より石材を出して功あり、これより村の南海岸一帯を大石と呼んだ。今後もし若林家、或は八幡神社あたりから祥龍寺歴代住職の書状でも発見されるならば、更に詳しい歴史が明らかになると思う。期待するところである。

この間の事情を推測してみると次の様な事ではないか。  
承応三年（一六五四年）中国より隠元禪師來朝、沈滯して日本仏教界に一大センセイションを巻き起す。寛文二年（一六六二年）には宇治の黄檗山萬福寺を開堂、幕府も次第に隠元を重んじ、天皇及び公家の信望を得る。

この時、妙心寺派より黄檗山に転ずる寺院多くこの頃、祥龍寺も何らかの理由で萬福寺の傘下に組入れられ、黄檗山から監院として即宗和尚が管理したものであろう。この即宗和尚、及び鐵彈和尚の力で、毛利吉広公の帰依を得て再び禪林（禪宗の寺院）として盛えたに違ひないのである。

先にあげた洪鐘鑄造の因縁は、徳川氏五代綱吉將軍の夫人鷹司閑白教平公の息女贈一位信子の追福に侍女北爪氏が寄進とある。

鐘銘には「元禄十四年（一七〇一年）臨濟正宗（正当孝教）第

三十四世開山嗣祖沙門鐵彈」の铸造と記されている。

鐵彈和尚は五十年以上、祥龍寺に住職してゐたと見えて、宝暦年間（一七五〇年頃）若林平右衛門敏英が帰依して寄進した記録がある。「将军より寄附の宝器あり云々」というのもこの頃の事であろう。しかし、この繁榮も束の間で終り、一年後の火災に羅りて忽ち祥龍寺は堂舎灰燼となつてしまふ。

これによつて考察すると「旧天城文書」に記録されている文明元年から天正九年までの三十年間と、寺社吟味帳にある寛永五年から寛文十二年までの四十四年間は、明らかに祥龍寺に住職が常住してゐたと

この点、茲一二、三期間の資産構成の推移を見れば明である。

資金構成表（単位千円）

	七年上期	八年上期	九年上期
払込資本金	一六、七八一	一七、〇六〇	一五、八二九
銀行券	五一、六二〇	四三、一三三	四七、九五四
諸預金	九一、二五二	九〇、三〇三	一〇一、四七二
合計	一六〇、六五三	一五〇、五九六	一六五、二五五
政府借入金	九〇、二九一	八九、三七九	七七、五二四
コールマネー	四、八〇〇	二、五五〇	四、九〇〇
再割引手形	八九、九一〇	六〇、六二八	三六、三七九
合計	二二五、二七六	一七三、六三八	一五七、七五三

即ち、問題の特融借入金は漸減して九年上期には七千七百余万円と八年上期に比較して一千二百万円を激減している。尤も借入金、コールマネーは大分増加しているが、再割引手形は実に二千四百万円を著減しているので結局、八年上期に見られた如く運転資金の半以上を外部負債で賄つてゐると言う非難は解消する様になつていて。

他面、同表に明な様に預金を内地銀行並に増加に転じてゐるが、これも、金融恐慌当時の悪人気が漸く薄れて當行の信用が回復した一証左と見て大過あるまい。

然も、最近は台湾内に於ける各種事業は等しく活況を呈し、新事業の計画されるものあつて當行の地位は益々重要性を加えつつあり、資金需要に応ずる為に目下保証準備発行の拡張が議題とされている。

——台湾銀行は鈴木商店の主力銀行であり、当小史に鈴木商店に関連する

興味ある文面がありますので転載させていただきました——編集室より

## 辰巳会ゆかりの

### 祥龍寺の歴史（その三）

（たつみ誌70号よりの続き）

#### 菅應峰

略歴その他は一切不明である。

古い石碑は現在、次の六基が残つてゐる。

○天庵篤宗和尚

（安政三年寂）

○湛州澄和尚

（年代不明）

○本石淨基和尚

（〃）

○徹翁宜參和尚

（〃）

○一得淨玄和尚

（〃）

○得翁元和尚

（〃）

かろうじて名前は判読出来るが、五基の年代はいずれも不詳である。  
「西摂大觀」に「祥龍寺址・宝塔卵塔數を列ね、中には蒼苔面」と書留めてある宝塔卵塔は、蒸して風雨千古の佛を留めしものあり」と書留めてある宝塔卵塔は、昭和の再建後、どういうわけか現在の八幡墓地に移され、昭和十三年の水害の折、悉く流出したと云う。これらの墓は若林家のものであるが、中に歴代和尚の墓もあつたそうである（乾後次氏談）。因みに祥龍寺唯一の古墨跡に、祥龍默堂の名があるが、年代は不明。

前述の即宗和尚、鉄禪和尚、覺玄和尚、篤宗和尚、湛州澄和尚、浄基和尚、宜參和尚、淨玄和尚、德翁玄和尚、默堂和尚はいずれも「禅宗法系譜」に名は無く、今後時期を見て「黄檗宗宗派図」を調べて見たい。

このようにして祥龍寺は荒廃無住のまま、明治維新を迎えて、排仏棄釈の波をこうむつてやがて完全に廃寺となつて、土地まで他人の手に渡つてしまふのである。

この鐘は祥龍寺が寛政十一年（一七九九年）に石屋治左衛門に売られた時、村方が代銀一貫三十匁で買取つたもので村方の所有である」と兵庫県令神田孝平に届け出ている書類が若林家にある。

宝積寺光雄和尚の口伝によれば明治までは宝積寺から弟子の何人かが輪番で祥龍寺を留守していたと云われる。祥龍寺墓地に「天庵篤宗和尚」の石碑があり、安政三年寂（一八五六年）と刻まれている。竹堂和尚兼務の後、祥龍寺で亡くなつた和尚とすれば歴代住職でもなく

鈴木治雄会長は、平成二十年九月三日に九十歳以上の県内在住者で、長年にわたり社会貢献され今も活躍している人に贈られる「高齢者特別賞」の表彰を受けられました。  
写真は、鈴木会長が井戸敏三兵庫県知事より表彰状を授与されているところを神戸新聞に掲載されました。

## 鈴木会長 兵庫県高齢者特別賞を贈られる



郡八幡村字戸穴に生まる。十四才同村願成寺にて祝髪、美濃国伊深村

正眼寺、名古屋德源寺、更に神戸祥福寺僧堂を遍歴して実參実証遂に

その蘊奥を盡し明治四十年十月、神戸祥福寺住職となる。

大正十三年五月大本山に入寺開堂をなして、妙心寺第五百五十一世

として第一座の位に登り妙心寺派管長に就任。翌十四年五月宮中豊明殿にて御陪食の榮を賜う。昭和二年六甲山麓に宝珠山祥龍寺を再興し、自ら中興開山となる。昭和十九年三月奄然として遷化、寿八十六才。

碧層軒老師が、祥龍寺を再建しようとされたのは、大正十二年の春の事で、妙心寺派管長就任の前年である。

偶々摩耶山下に尋常ならざる石垣の残存せるを以つて其の由緒を稽査するに、昔の広国山祥龍寺の遺蹟を発見、老師はかねてより寺門を代表して世俗の仏事法要に任すべき一院の建立を感ずること久しく、この奇縁によつて計らずも、時と人を得、明治の廢寺以来五十有余年にして祥龍寺再興の機運が熟したのである。

因みに「祥福寺別院建設主意書」に残る建設勧進主唱者の名をあげてみると、

(イロハ順)

生島五郎兵衛 石田勝作  
神田兵右衛門 新田茂兵衛  
嘉納治郎右衛門 田村市郎  
武岡豊太 鳴瀧幸恭  
直木政之介 宇田眞讓  
小野嘉六 深澤富太郎  
山根重兵衛 小寺謙吉

ているのも面白い。

土地を寄進したのは深沢富太郎氏である。それまでここに村の土俵があつたらしい。明治の中頃までお宮さんの祭りに、相撲大会が盛んだつたという。

村の古老乾俊次氏は若い頃、祥龍寺再建の工事を手伝つた人であるが、基礎工事の時、大きな松の木を何本か切り倒して地ならしをし、鬼瓦を担ぎ上げた時の事など語つてくれる。又、老師に頼まれて祥福寺から老師の持仏を担いで来たそうである。乾俊次氏の話の中に次の俗謡がある。

篠原だんごの教専寺  
八幡きよろきよろ梅仙寺  
上野かさかきがんしよう寺  
くうやくわづの祥龍寺  
荒廃の時代の祥龍寺の有様がしのばれる。

灘区役所広報相談課の発行による「灘区の町名」という小冊子に次の里謡をのせてある。

篠原すぎたるなんじやいな

しのわらすぎたる寺三軒

寺三軒とは、祥龍寺、慶隆寺、教専寺である。

完成の時、篠原地区から新たに栗林耕平氏を総代として三十軒が檀家に組入れられ、ここに宝珠山と山号を変えた祥龍寺が発足したのである。

大正十五年六月、六甲村篠原地区の区画整理の地図がある(大利新太郎氏所有)。昔の区画の上に赤線で現在の新しい道路が書き入れられているのでわかりますが、大庄屋大利家の外には祥龍寺の周りは家

後藤利彦

有馬市太郎

荒木伊久太郎

貞永省三

北田広吉

島田龍逸

森本隈太郎

鈴木岩治郎

鈴木よね

藤井忠兵衛

米澤吉次郎

兼松商店

川勝辰子

澤田善一郎

戸田ふみ

川勝鹿之助

鳥尾和三郎

等の名がある。

鈴木よね女史に関しては次の様な逸話がある。(柳田義一氏談) 大正年間、三井、三菱と並んで天下を三分した鈴木商店も実はこの頃は昭和の恐慌で破綻のきさしが見えていた時である。老師の勧進を受けて、よね女史は大番頭金子直吉氏に相談された。すると金子氏は、「実はお家さん(よね女史)の給料がこれだけ留つております」と机の引出しから封の切つていない何年か分の給料袋を出されたそうである。当時二万円と云うと、現在どの位の価値であろうか。

老師の勧進の仕方は、相手の家に行かれても口の中で、もぞもぞ何か云われるだけで、はつきり意味がわからない。しかたなしに隠侍の雲水がそばから口を出して用件を伝えるという具合だつたらしい。それでこれだけの贊助のあつた事は、まったく老師の人徳というより外はない。

大工は兵庫の橋本と云う棟梁で、老師の居られた祥福寺関係の棟梁であった。祥龍寺が祥福寺を一まわり小さくしたそつくりの設計になつ

が一軒もなく、まったく山の中である。土地の人は山の寺と呼び、後の山で狐が鳴き、前の川では火の魂がとんでいたそうだ。

完成後まもなく、例の祥龍寺の古鐘を、篠原村字小川の教専寺から返還の話がまとまり、昭和八年一月、鐘樓門も出来て目出度く還元式が行なわれた。新装なつた祥龍寺に「土地の風光絶佳なると相俟つて、四時杖を引く者多し」と云う。祥福寺の旧隨老尊宿の多くが、この頃の祥龍寺に足を運んでおられる。

土地の古老からよく聞く話の中に観艦式がある。昭和五年十月二十六日、神戸沖で行なわれた観艦式には、百六十五隻の艦船、七十二基の飛行機が参列、御召艦が各艦船附近を御通過の時には、満艦飾をほどこし、乗員は登舷禮式を以つて迎え、二十一発の皇禮砲が鳴り響いたのである。この時、祥龍寺に村の者ほとんどが集つて石垣の前に足場を組んで見物した。

この頃、碧層軒老師の提唱参禪会も盛大に行なわれ、再興なつた祥龍寺の意氣軒昂たる様子が、写真からも感じられる。

しかし間もなく昭和十二年、支那事変勃発、時代は騒然たる雲行きとなり、修行の雲水も次第に少なくなつた、碧層軒老師の静かな晩年がおとずれる。この時期、老師に仕えたのが宗信和尚である。

遷化は昭和十九年三月二十八日、二週間位前から薬は一切用いられず、医者が注射しようとすると、「わしの往生を邪魔するな。」と叱られたそうである。